

パラオの思い出

パラオ熱帯生物研究所同窓会

抄録:木村匡

Memory of the Palao Tropical Biological Station

Abridged by T. Kimura

1934年、パラオに熱帯生物研究所が設立されました。これは日本学術振興会が設立したもので、熱帯の生物を研究するため、当時の若い研究者が交代で数多く赴任しました。残念ながら研究所は戦争のため、わずか10年で閉鎖されてしまいましたが、その間研究者たちが珍しい熱帯の生物の生き生きとしたに魅了された事は想像に難くありません。

平成4年11月24日、当時パラオにいらっしゃった先生方が、阿嘉島臨海研究所にお見えになり、その当時の貴重で楽しいお話を伺う機会がありましたので、ここにそのほんの一部を紹介いたします。

参加者は、かつてパラオで活躍された阿部宗明先生、川口四郎先生、元田茂先生ご夫妻、三宅貞祥先生に加え、貝類の採集でこられた波部忠重先生、琉球大学でのサンゴ礁シンポジウムの帰りにお越し頂いた本川達雄先生、甲殻類学会に参加されていた小田原利光先生、大森信先生、そして当財団の保坂理事長、中山参与、研究員の林原、下池、木村でした。

保坂「だいたいパラオというと、どのくらい日にちをかけて行かれたんですか？」

三宅「サイパン、パラオと行くと10日。後は12日から2週間」

元田「直行は1週間」

川口「私は当時、門司、あるいは神戸、それから横浜へ行って・・・」

大森「じゃあ、一回バックされてから・・・」

川口「そうなんですよ」

保坂「じゃあ当時は横浜まで行かれるだけでも大変

なんです」

川口「その通りなんです。片道2週間です」

保坂「そういう所へ行くのなら、あれ持ってけ、これ持ってけとか、いろいろ持たされたりしたんですか？」

川口「パラオにいたときは、そんな、慰問袋というものはなかったね。どう？」

元田「慰問袋？一つも来なかったよ」(笑)

三宅「私は向こうで阿刀田さんという仙台の二高の校長の息子さんと一緒だったんですがね。そうしたら(船の)便が来るごとに、お母さんから慰問袋が来るんですよ。それが羨ましくてね」

保坂「で、その慰問袋というと、食べ物が多かったんですか？」

三宅「うーん、覚えてないですね。食べ物だったらおすそ分けが貰えたはずだがなあ」(笑)

元田「そのころには店がたくさんあってね、便利でしたよ」

三宅「そうそう、デパートなんてありましてね。」



うちわ一本でも配達してくれるんですよ」
本川「なんていうデパートだったんですか？」
三宅「熊本からきてるデパートでした。月一回、私
どもも文部省から（お金を）頂くんだけれど、
それじゃあ足りないから家から送って貰うん
ですよ。ですから月が変わらないと金がないん
です。だからビール一本買っても月末に払う事
にしてね」

大森「その頃はそうすると、お金の話ですけど、
全部自分で持っておられたんですか？銀行に貯
金するとかそういう事は全然なかったわけ
ですか？」

三宅「いやー、貯金するほどお金はありませんよ」

川口「そんなにお金が残ってるもんかね」（笑）

三宅「私は無給副手の時にいましたからね。親から
貰うしかなかったんですよ。それでも平気で、
ひもじくなかったですよ。一ヶ月は払わん、ま
だ金が来んからと言ったらおうように構えて店
も許してくれるわけですよ。そのかわり、来
たらさっそく払いますからね」

川口「戦後も戦争のさなかも、生物なんかやってた
ら飯が食えないからと、（生物学から）離れて
いく人はあったんですよ。ですが、生物やっ
てて飢え死にした人なんて、聞いた事ない
ですよ（笑）。ですから、何は無くたって
生きていけるもんなんですよ」

三宅「そうなんです。光と水さえあったら生きてい
けるんです」（笑）

大森「光合成みたいなもんですね」（笑）

三宅「いやあ、本当にそういう事を感じましたね」

川口「私はもう16年一人暮らしをしたから、なん
でも食べられる時にはうんと頂く。その
かわり、何も無い時はじいっと我慢して
いるんですよ」

保坂「それはパラオにいらっしやった時に覚えられ
たんですか？」

川口「そうです。身についたんですよ」

阿部「私はあの頃、元田先生が作るカレーライスが、



これまで食べた中で一番おいしかったですね。
玉ねぎをチョロチョロッと炒めただけなんです
がね」

三宅「私が行った時はね、先輩で大変贅沢した人が
あると、阿刀田氏から聞いた事があるんですよ。
食べた後、食器を洗うのにビールでやるって
いうんです。本当にそうだったんですかね。阿
刀田氏は、その洗った後のビールを貰いた
いぐらいただいたと・・・」（笑）

大森「毎日の日課は決まっていたんですか」

三宅「自分で決めたらいいんです」

大森「別に8時に起きたって6時に起きたって構
わないんですか」

川口「そういうのはね、元田先生がちゃあんと日課
書いて下さってね」（笑）

元田「いやあ、覚えてないよ」（笑）

保坂「でも、何時頃起きられたんですか、朝食は
何時頃？」

川口「自分達で作ってたんですよ」

林原「各自めいめいでですか？」

三宅「僕は弁当屋から運んでもらってね」

元田「毎日食堂にいったよ」

保坂「するとみんなが研究所に集まるのはだいたい
何時頃だったんですか？」

川口「15分くらいかかりましたかね、宿舎から」

阿部「畑井先生が一番早かった。7時前には仕事
が終わっておられた。川口先生が私が帰ろう
としたら早すぎるよ、なんて言われたことを
覚えてま

すよ」

川口「いろんなことをやるには、ここでも同じだと思うんですけど、3人いれば3人が同じようにやるのは難しいと思うんです。やっぱり各々の方がいろんな流儀でやるものでね。たとえばですね、暗室を使うのによく見てると、この人こんなことやってるのにうまく写真が現像できるなど。人によってやり方がちょっとずつ違うんですよ。各々の流儀があるのをね、みんなこれちゃんと規則を作ってくれたのが元田先生なんですよ」(笑)

元田「僕はみんな失敗したんですよ。現像には水洗いが大変なんです。天水で水洗いするんですね。そうすると、みんな茶色くなっちゃったんです」

大森「水道はあったんですか」

元田「いや、無いです」

大森「そうすると皆さんは煮沸して飲んでおられたんですか」

川口「そりゃそうです」

三宅「できるだけ水は飲まないようにしましたね。夕方になるのを待って、夕飯が済んだらバーに行くんですよ。私はあまり飲めなかったんですけどね。夕方がくるのが本当に待ちこがれてね。水を飲んでないからビール飲んでね。一ヵ月後に払えばいいんですよ、そうすればチップも何も要らないでしょ」(笑)

元田「蒸留水は全部運んでました、日本から」

保坂「研究所では例えばスコールがあるときに積極的に水を溜めるようなことはやってたんですか」

元田「うん、どこでも屋根の水を全部溜めてた」

三宅「コックは2段になってたんです。で、下の方が雑用に使う水で、上は飲料に使う水なんです。それが雨が降らないとどちらも使えないくらいになるんです。スコールがくるのを待って、裸になって石鹸つけて、夕立であれするんです」

保坂「やっぱり雨が降らない時期があるんですか」

元田「ええ、ありますね。で、ネズミが入るんです、タンクの中に。気づかないで底で死んでるんです。それ知らずに飲んでんです」

保坂「阿部先生もそれを飲んでたんですか」

阿部「でしょうね(笑)。ポウフラもわくんですね、その水で」

中山「でも、ポウフラがわくぐらいの水はいいんだっていうでしょう。叩いてやると沈むでしょう、ポウフラが。その間にふっと飲むんですって」

三宅「それが、衛生的な飲物といったらココヤシの汁ですね。あれは冷蔵庫に入れて飲みました。始めはまあちょっと臭いが鼻について、でも慣れると安心して飲めますし。当時、私どもの所では5セント出して土人に渡して、こうやって指さすとスーっと登ってってトーンと落とすんです。また一つって・・・採集に出るときはあれを子供にとらして肩に担いで行きました。水筒代わりになるんです」

この他にもジュゴンを食べたり、ダイナマイトで魚の採集をしたお話や、沖縄出身の潜りの達人な人たちの思い出話など貴重な体験談がたくさんでしたが、ここで紹介できないのが残念です。当時、遠く日本を後にして、見るもの触れるもの新しいものばかりで宝の山に入ったように目を輝かせておられる先生方の若いお姿が目浮かぶとともに、私達はそんな情熱を持ち続けているだろうか、少々反省も致しました。

最後になりましたが、遠いところをわざわざ集まって頂いた先生方に厚くお礼申し上げます。これからも益々お元気でご活躍下さい。